

第5講 主体的・対話的な深い学びとコミュニケーション

林 徳治（甲子園大学） 久世 均（岐阜女子大学）

【学習到達目標】

- ・コミュニケーション能力を構成する3要素について説明できる
- ・教育的コミュニケーションについて説明できる
- ・現代のコミュニケーション活動の特徴を知り日常生活面で改善できる

1. コミュニケーション能力の構造（3つの要素）

人を育てる職業である教師にとって、学習者間での相互理解を深めるためのコミュニケーション能力は、極めて重要です。

コミュニケーション（communication）とは、「特定の刺激によって互いにある意味内容を交換すること。人間社会においては、言語・文字・身震いなど種々のシンボルを仲立ちとして複雑かつ頻繁な伝達、交換が行われ、これによって共同生活が成り立っている。」（国語大辞典，小学館）と記されています。すなわちコミュニケーションは、複数の人の間で記号を媒体とする相互作用と定義できます。人間は、社会において共同生活を営み、コミュニケーション活動により様々な課題を克服し、新たなものを創造し、さらに豊かなコミュニティを構築する協創・協働活動を行っています。

次に、相互理解のためのコミュニケーション能力の構造図を図1に示します。

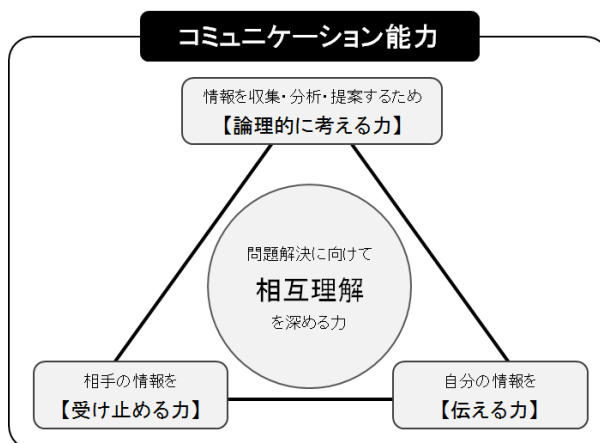


図1 コミュニケーション能力の概念構造

（『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』 p.10 より）

図1よりコミュニケーション能力は、3つの要素から成り立っているのがわかります。

一つ目は、コミュニケーション能力の頂点となる「論理的に考える力（critical

thinking, logical thinking)」です。これは、1.問題を発見し情報を収集する力、2.情報を読みとり考察する力、3.問題を明快に分析する力、4.解決策を提案する力、5.道徳的に判断する力を含みます。

二つ目は、「受け止める力 (assertion)」です。受け止める力では、一方的な提案や主張 (アグレッシブ) にならないよう、相手の気持ちや言い分を受容することで、双方が納得できる関係を構築するための1.受容的に聴く力、2.相手の気持ちを理解する力、3.相手を意欲的する力を含みます。

三つ目は、「伝える力 (presentation)」です。伝える力では、1.的確な指示を行う力、2.自分の魅力を伝える力、3.話に刺激があり記憶に残す力、4.身振りで伝える力、5.相手の立場を知り共感される力、6.自己の考えを主張できる力、7.情報を論理的に構造化する力、8.自分の情報を整理する力、9.プレゼンテーションの筋書きを作る力、10.議論に負けない力などがあります。これらは、相手の納得する提案や主張を、効果的・効率的に構築し、伝えるためのさまざまなプレゼンテーションの知識・技能です。

2. 3方向の教育的コミュニケーション

授業でのコミュニケーションは、①教授者の情報提示(指示, 説明, 発問など)、②学習者のお返し(回答, 意見など)、③教授者の働き返し(正解, ほめるなど)の3つの過程が基本的な考えです。この学習理論をもとにした教育的コミュニケーションを図2に示します。

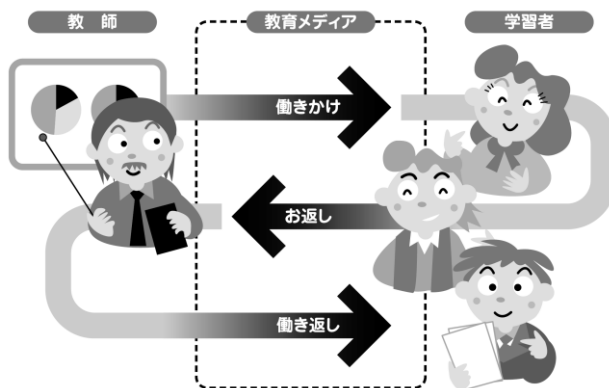


図2 教育的コミュニケーション

(『必携! 相互理解を深めるコミュニケーション実践学 (改訂版)』 p.3 より)

授業は、教授者と学習者、学習者相互間において、上記の教育的コミュニケーションの過程を繰り返すことにより営まれています。授業では、教科書、プリント、黒板、AV、PC、タブレットなど学習を支援する媒体としての教育メディア

を活用し、教育的コミュニケーションの改善を図ります。また、図2において教授者からの働き返しをKR (knowledge of results) と言います。これには、正誤を知らせる知的KRと、受容やほめたり励ますなどの情的KRがあり、教授学習過程では重要な役割を果たします。知的KRは、学習者の発言や発表に対して正誤を知らせる認知面にかかわる情報です。情的KRは、学習者の発言や行動に対してほめる、認めるといった情意面にかかわる情報です。教授者の知的KRと情的KRの使い方によって、学習者の理解や意欲が大きく違ってきます。

学校では、学習者の知識や技能のレベルがさまざまな状態にあります。教師は、それぞれの学習者の既習度や特性に応じて適切な情報を抽出し、わかりやすくかみ砕き説明、発問して適切なKR情報を与えることのできる能力が求められます。

3. コミュニケーションの分類

(1) 言語コミュニケーション (verbal communication)

言語とは、人間社会において、コミュニケーション活動の基盤となる字音的表現であり、人間が創作した人為的な記号体系や音声による記号体系により、人間の感情や思想、意思などを表現したり、相互に伝え合うことができます。言語の目的は、言うまでもなく情報を他者に伝えることです。それでは、言語を音声言語 (話し言葉) と文字言語 (文字言葉) に分類し考えてみましょう。

音声言語とは、オーラルコミュニケーション (oral communication) が一般的で、聴覚を利用した口頭での意思伝達です。音声言語は一過性による人と人との直接的なコミュニケーションであり、人それぞれに独特の音声の高低や強弱、音質、ポーズ (間) などの特徴が付加されます。同時に、話し手の意思や意味を聴き手が解釈することで話の内容があいまいになるケースもあり、聴き手の既有知識、し好、経験、信頼、感情、立場などの特性によって、多様に解釈され理解されることがあります。また、話し手、聴き手相互間で、「～を言った」、「言っていない」、といった相互の主張によるトラブルがあります。これを補うツールとしてビデオやボイスレコーダなどのメディアがあります。

文字言語は、人間の視覚を利用した文字による意思伝達です。文字言語は記録・保存により、さまざまな用法によって独特の性質をもたらすことができます。そこで、紙や電子媒体を用いて表現、保存することで、伝達の範囲を時間的・空間的に拡大できます。

(2) 非言語コミュニケーション (nonverbal communication)

非言語コミュニケーションは、言葉で記号化できるもの以外で、視聴覚など五

感を通して収集できるものを言います。たとえば、人の表情や身振り、アイコンタクトをはじめ、髪型、服装、におい、身に着けるアクセサリ、化粧品に至るすべてを含みます。現代では、グローバル化が進み、他の国の人々との異文化接触の機会が増えました。その結果、異文化間での言語の違いはもとより彼らの風習や習慣や思想の違いで、非言語コミュニケーションによる誤解や齟齬が生じ、相互理解が困難な場合があります。たとえば、タイ国では子どもを含み人の頭をむやみに撫でたり触れたりしてはいけません。日本でよく見かける、教師が子どもをほめる時に行う頭を撫でることはタイ国では見られません。異文化コミュニケーションを考えると、言語コミュニケーションにばかり注目する傾向がありますが、他国の文化や思想を理解する他者理解の視点から非言語コミュニケーションを見直すことが大切です。

最近のコミュニケーション活動は、スマートフォンや電子タブレットなどの普及により表現や伝達方法、内容がますます多様化する傾向にあります。ICTの進展により、映像を介した非言語コミュニケーションも可能になりました。そのため私たちは、普段なにげなく使っている非言語コミュニケーションの特徴を学び意識し、相互理解のためのコミュニケーションについて再考察することが大切です。

次に、非言語コミュニケーションに関する有名な研究があります。アメリカの心理学者アルバート・メラビアン（A. Mehrabian）は、コミュニケーションにおいて話し手が聴き手に与える影響は、7%が言語コミュニケーション（言語情報：言葉そのもの）であり、残りの93%が非言語コミュニケーション（55%が視覚情報：見た目・表情・しぐさ・視線、38%が聴覚情報：声の質・速さ・大きさ・口調）であるとし、非言語コミュニケーションの重要性を述べています。この法則は、メラビアンの法則と呼ばれ広く知られています。

また、非言語コミュニケーションの研究者であるアーガイル（M. Argyle）によると、聴き手の70%以上が話し手の話を聞いているときに目を見ている、会話をしているときは、約60%が相手を見ていると報告されています。他にもエクマン（P. Ekman）は、顔の表情各部分の比率より、基本的感情表出度を表していることを示しています。

以上のように、多くの研究がなされていることから非言語コミュニケーションの重要性が高いことがわかります。

4. 現代社会でのコミュニケーションの光と影

スマートフォン、インターネット、Wi-Fi のインフラの充実に加え、LINE、Skype、Facebook などコミュニケーションツールの無料アプリが普及した現代では、私たちは日々メディアを利用したコミュニケーションを行うようになりました。ここで言うメディア“media”とは、ミディアム“medium”の複数形であり、声や文字などの情報を伝達する媒体のことです。

マーシャル・マクルーハン (M. McLuhan) は、その著書『人間拡張の原理』で「すべてのメディアは、われわれ人間の感覚の拡張である。メディアはメッセージである。すべてのメディアの内容は常にもう一つのメディアである。」と述べています。つまり、メディアを人間のもつ感覚まで含めているのです。たとえば、衣服は皮膚の拡張、車輪は脚の拡張、電話は耳の拡張などといったことです。

ICT が発展・普及した現代では、社会システムの合理化や効率化に伴い、人と人との直接的なコミュニケーションの機会がますます減少する方向に進んでいるのは事実です。前述したように、今日ではいつでも (時間)、どこでも (場所)、だれとでも (人) を意識せず、メディアを介した間接的なコミュニケーション活動が容易な時代になりました。現代では、ICT の恩恵や利益など光の部分の先行し、通信メカによる CM などの影響で便利な生活が誇張されています。しかし、従来の直接対話に比べ、メディアを介した間接対話は、私たちが予期できなかった想定外の事故や事件、犯罪を招いたり、人間の価値観や判断、活力、究極的には生命まで脅かす影響を与えたりするケースが生じるようになってきました。ICT 恩恵の背後には、個人情報や犯罪利用など多くの問題や悪い影響につながる影の部分が多々あることに大きな社会事件を通して気づきます。そのため、一人ひとりが情報・メディアとつきあう教養やコミュニケーション能力 (言語・非言語・メディア) を養う必要性を自覚し、日々の生活で実践・向上させる心構えが最も大切です。

【課題】 コミュニケーション実践のためのデジタル Web 教材を行ってレポートにまとめなさい。

<http://www.hayashi-tokuji.com/td-ict/index.html>

【参考・引用文献】

- ・林徳治・藤本光司・若杉祥太『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』ぎょうせい、2016
- ・林徳治・奥野雅和・藤本光司『元気がでる学び』ぎょうせい、2011

- ・ 沖裕貴・林徳治 他 7 名『必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学
（改訂版）』ぎょうせい, 2010